五七忌法會（其二）

祥福寺靈前

鈴木岩治郎氏の弔辭朗讀

五七忌法會（其二）

祥福寺に於ける施主、近親者

故人墓標

西川文藏之墓

辛酉四月吳昌碩年七十八

西川文藏君略歷

西川文藏君略歴

君は明治七年一月廿八日滋賀縣高島郡今津町に生る、生家は西江州に於ける素封家にして、米穀肥料薪炭商を營み、商號「粕文」を以て知らる、父文次郎既に亡し、母ますは尚健在す、君は其長男にして、四弟二妹あり、同二十年四月（十四歳）、笈を負ひ在大津滋賀縣商業學校に入學する迄、君は鄉里今津に在りて小學教育（初等科、中等科）を受く、幼にして穎悟、商業學校在學中の如き、同級生は勿論全校二百有餘名中成績最も優秀、殊に珠算に堪能にして「達人」の名を博したりき、當時校規に依り、生徒は居常必ず前垂を着けて登校せしと云ふ、在學三年にして、同二十三年三月業を卒ふ、君小成に安んぜず、進ん

で高等の教育を受けんと欲し、兩親に議りて同意を得たれば、再び笈を負ひて東都に出づ（十七歳）、當時叔氏（西川文三郎と稱す）君に諭して曰く、「おまへが今度東京へ行くのは、唯此上の學問をする爲ではない、大商人になる道を研究さす爲に遣るのであるぞ」と、君大に感奮する所あり、同二十三年四月東京高等商業學校に入學し、夙夜叔氏の教訓を服膺し、孜々として勉學懈らざりしが、偶々三學年の夏、學校休業に因り歸鄉せしに、家庭の事情は再び君の上京を許さゞること、なり、決然退學す、實に同二十五年十九歳の秋なりき、于時父君は今津村長の職に在りしかば、君は留まりて其事務を輔佐し、傍ら高島郡役所に勤務せり、幾ばくもなくして之を辭し、翌二十六年末（二十歳）、貿易界に奮鬪するの覺悟を以て神戸に來り山口氏に寄る、一旦歸鄉、同二十七年三月徵兵檢査を了へて再來し、戸田氏の紹介に依り初めて

鈴木商店に入り、先代岩治郎氏に事ふ、爾來刻苦精勵、物品受渡集金の事より書類の作製コッピー取等の瑣事に至るまで敢て苟もせず、熱心其業に從ひしかば、夙に先代の寵遇を得たり、當時鈴木商店は唯神戸の一砂糖商たるに過ぎざりしが、金子氏等の劃策宜しきを制せしと、君が黽勉輔佐の功とに因り、各般の事業緒に就くと共に、店運次第に隆昌を來し、日清日露兩役後經濟界の變動時に於ても、善く勢の趨く所を察し、措置總て肯綮を得たり、同四十一年二月擢でられて支配人と爲る、而して其事業益々順調に發展し、遂に克く店名を內外に知らるるに至りしもの、君が多年盡瘁の力與つて大なるものなくんばあらず。

君別に脩竹の號あり、資性溫厚淡泊にして同情に富み、公平無私にして人を見るの明あり、旦事を處して裁決流るゝが如し、平素沈默寡言、寧ろ言辭に巧ならざるも、其書翰文を草するや一氣呵成千言立ろ

に成る、而も行文平易輕妙にして一唱三歎の慨あり、君又頗る友情に敦く、滋賀縣商業學校在學中より、吉田熊太郎氏（神戸、中井商店支配人）大音新吉氏（大阪、大音商店主）と友とし善し、常に來往交懽、自ら稱して大津三友と云へり。

君忙中の閑を以て書畫骨董を愛翫せしが、世の所謂珍藏家と撰を異にせるのみならず、其鑑識に至りては眞に大家の壘を摩するものありたり、又讀書を好み、餘閑常に內外の新刊書を通覽し識見人の意表に出づるものありき。

比年矻々店務を執掌して健康を顧慮するに遑あらざりしが、大正七年夏以來稍異常を感じ羸瘦日に加はる、大正九年三月醫師の診斷により胃潰瘍の兆候ありと知るや、乃ち家居靜養すること數旬、日を逐ひ輕快を覺ゆる如くなりしも、越て五月十四日、腹膜炎を併發し百方醫

療を加へしも癒えず、翌十五日午前十一時十五分終に永眠せり、享年四十七、哀哉。

金子氏歎じて曰く、「實に惜しいことをした、西川君は誠に潔白な男であつた、仕事は片端からサツサと片付けて行く、それは慥にエライ感心して居た」と、言簡なりと雖も君の面目躍如たるを見る、眞に痛惜に禁へざるなり、君年二十五、即ち明治三十一年十一月十二日、山口龍吉氏の長女きやう子を迎へて室とす、爾來琴瑟相和し二男四女を擧ぐ、夫人は親和女學校の出身にして、資性温順貞淑、愛敬を捧げて良人に事へ、眞情を傾けて人に接す、而して家を治むる法度あり、同棲二十有三年奉承敢て違はざりき、鈴木商店深く君の死を悼み、店葬を以て之を行ふ、且其遺族を遇すること厚し、噫死して亦餘榮ありと謂ふべき也。

大正十年六月

編者誌す

夫人の手に成れる

病床日誌

附、病中の食餌

病床日誌

（大正九年三月二十日起）

かねて、三月中頃よりお顔色大變惡しき樣思ひ、注意し居りしが、其儘御自分も大した事なしと申され、日を過ごす中、十七日朝山登りせられしより、大變足重き樣申され、十九日夜足を見せて戴きしに、大變むくみあり、是非醫師にかゝらるゝ樣お勸めす。

三月廿日、午前松永先生御越下され、診察の結果、大變貧血して居る故、十分血の殖える食物を取るやう注意せらる、一度便の檢査をお願ひす、それより又々肉食を取ることになり、ビステキ等を召上る、大變お氣に入り、喜んで召上る。

廿一日、朝便を持たせ遣る、幸ひ日曜故、朝よりお店を休まる、今日より暫くの間、お店を休み十分養生して戴くことにす、午前十時より午後一時過まで、よくお休みになり、大變氣分よくならる。

廿二日、松永先生御越下さる、西先生に診察して戴くやうお願ひす、昨年夏頃より

時々胃の惡き爲氣分すぐれず、色々心配して手當もせしが、やはり思はしからず心配の餘り西先生の御診察を受けしに、(十二月中丁度三回)病名は胃擴張ならんと申され、又少しく肺尖の氣味もありとて、其手當も十分になしたれど、時々胃の痛みあり、自分一人心を痛め居る、今年二月末迄は藥を用ひられ、三月に入りても別に變りなく過ごす中、七日の日曜に、大音氏及び芳太郎氏と寶屋へ行かれ、食事せられし爲か、其夜中大變胸いたみ、色々手當して漸くおさまりしことあり。

廿三日、午前松永先生御越下さる、便を檢べたる結果、色の黑きは血便なりし爲にして、病氣は胃潰瘍なりと申さる、九時頃西先生お立會にて診察を受けらる、西先生は肝臟も少し大きくなり居れど、差當り胃潰瘍の手當をせねばならぬと申され、それに貧血の起りも判り、以後は一切流動物のみ取ることゝし、成可くからだを動かさぬ樣注意せよと申さる、俄に大病人となられし譯なり、太田主人見舞に見え、私に十分注意せよと親切に申し下さる、お菓子を戴く、お店の御進物品を持つて又御越になる、夜分お店の岡氏見える、椋野氏永井氏お店を代表して、お越あり是非とも氣長く十分に養生する樣、御注意下さる。

廿四日、朝名古屋今井氏來る、次でお店の高橋氏見舞に來られ、タラコン湯を戴く、土屋氏、淺田氏、楠瀬氏も御見舞に來て戴き誠に喜ぶ、山口、高橋來る、十二時頃金子樣御見舞下さる、大變喜ばる、暫くして松永先生診察に來らる、丁度柳田樣御見えになりお話なさる、御歸り後暫くからだを休められ、それからお店より持參の電報等一々目を通され、九時頃休まる、其處へ昨日歸神せられし文之助氏見え、十時頃に歸らる、夜中二回便に立たる。

廿五日、朝より雨天の爲氣分すぐれず、岡氏御出下さる、十二時食後暫く休まる、二時過床の上にて髭を剃らる、大變氣持よしと喜ばる、おとしさん見舞に見え、ビスケットを戴く、和四郎氏、上田氏來らる、便通あり、黑き便三分普通の便七分の割にて澤山あり、森樣御見舞に來て戴く、午後七時谷氏、日野氏御見舞下さる、岡氏來られ入れ違ひに北尾氏見える、少し長き爲氣分惡しき樣見ゆ、午前二時小便に起らる、

廿六日、朝早く横濱の北村氏御越になる、久しぶりにて機嫌よくお話せらる、十二時頃芳太郎氏東京の岡本氏と共に見え、病氣と聞かれ大變驚かる、一時過ぎ太田氏お供して御本家のお家樣御見舞下され、誠に恐れ入る、御歸りに西洋間迄お見送り

に立たる、少し疲れある樣見受く、無理に休んで戴く、四時頃松永先生御越下さる、大分よき樣申さる、よし子熱あり、多分麻疹ならんと申さる、芳太郎氏見える、谷垣校長久しぶりにて御越下さる、病名を聞かれ驚かる、例の通りして戴く(靈子術)、後藤氏より本を戴く、夜岡氏見える、午前一時小便あり。

廿七日、今朝は別に氣分變りなし、毎朝六時半には洗面に立たる、其間大急ぎに室内の掃除を爲す、食後髭を剃られお氣分よし、八時半谷垣先生御越になる、松永先生見え診察して戴く、今月中は流動物を取るやう申さる、重永氏御見舞下さる、午後芳川氏、平高氏御越になる、五時頃松永先生見え診察して戴く、谷垣校長又見える、よし子麻疹ときまる、山脇母堂、朝田氏御見舞下さる、便通なし。

廿八日、朝氣分よし、父、孝來る、加藤氏御見えになり玉子を戴く、お目にかゝらず、森氏夫人御越下され色々頂戴す、この頃午後はいつも少し疲れて氣分惡し、四時谷垣校長見える、便通なき爲色々手當せしが甲斐なし、校長に李軒先生の幅等御目にかけ大變心慰めらる、森樣より御茶を戴く、寶屋のおかみ見舞に來る、カステイラを戴く、便通なく大變氣にせらる。

廿九日、朝谷垣先生見える、澤村氏夫人來らる、正金の森氏御挨拶に見える、髭を剃られ大變氣分宜しく見受く、午後松永先生見える、別に變りなしと申さる、午後七時頃伯母樣廣島より歸神せらる、芳太郎氏も來らる、一時頃床に就かれしが、からだ痛みてお休み出來ず、色々お世話申す。

卅日、別に氣分に變りなし、日々雨降りにて鬱陶しく困る、谷垣校長見える、十時頃吉田氏見え、御目にかゝり十二時過迄色々御話になる、食後休まる、自分も少し頭痛して困る、高倍氏より見舞品戴く、午後松永先生に石鹼灌腸をして戴く、十分後澤山便通あり、例の通り岡氏見える、妹尾氏御見舞下さる、九時過谷垣校長見え、十時休まる、夜中少し苦しまれし樣子耳にせしが、自分も晝の疲れの爲うつらうつらとして確ならず、二時過小便に立たる、其後少しからだ痛むと云はれ、暫しおさすり申せば氣分よくなられ休まる、自分も十分氣をつけて休み居れど、晝の疲れにて時々呼起さるゝことありて誠に濟まぬことゝ思ふ、自分は日夜少しも心の休まる間なく、食事進まず胸つかえて痛き樣覺ゆ、せめてお天氣にても好ければと思ふ。

卅一日、今日も亦雨降りにて鬱陶しく困る、病床に在る主人もさこそと誠にお氣

の毒に思ふ、その爲にや氣分すぐれず、されど節季の事とて手形四五枚書いて戴く、谷垣校長見え、午後髭を剃らる、おとしさん見えお目にかゝる、松永先生見え、昨日の便お目にかける、大變よしと申さる、柳田氏夫人見え、九時頃谷垣校長も見える、夜分少しからだ痛みしとのことなるに、自分を起して戴かず誠にすまぬ心地す、今日濱口氏より珍しき鉢植の花を戴く、大變喜ばる。

四月一日、朝氣分よし、前川を呼表具を賴まる、西先生、松永先生御來診下さる、餘程經過よきやう申さる、少しづゝカステイラ位を始よと申さる、松永氏より鉢植の花を戴く、水澤氏夫人見える、午後服部氏見え、少々長話せられ心配す、丁度谷垣先生見え喜ぶ、六時孝來る、大變元氣な顏色なりと喜ぶ、岡氏見える、お目にかゝらず、谷氏より病氣の養生法等御言づけありて承はる、播新主人電話にて見舞はる、夜中二回小便に起らる。

二日、自分は今朝早くより目さめ困る、又々雨天、肉汁の時、プツヂングを作り差上る、お氣に召す、髭を剃らる、座藥を入れて便通を促す、固き爲痔きれお痛みあり、湯にてお洗ひ申す、大變心地よしと申さる、今日晝から少しおも湯の中に米粒のまじり

し位のものを差上る、午後服部氏より幅を戴く、松永氏見える、松永先生御越になる便を見て戴く、よき便なりと申さる、去る卅日より須原熱あり、日夜氷にて冷す、夜中千代が世話せし爲千代又休む、武二も今夕より熱あり、千代に十分注意せしが、次へ次へとうつりしは殘念なり、自分も平生餘り强き方ならねば、十分氣をつけ服藥をなす、武二熱上る、芳太郎氏見える。

三日、朝少し粥を召上る、灌腸して大便通ず、大變に澤山あり、今朝より又あき子熱あり、熱高き爲孝を賴みて伯母樣と二人に看護を賴む、午後より天氣よくなり氣も淸々す、播新の主人見舞に來らる、谷垣先生見えしが御目にかゝらず、勇藏氏及び本庄氏へ詳しく病狀を報知す、主人の病氣は日々經過よく行き居れど目を離せず、其上子供等皆々病床に在りて自分一人頭を痛むるのみ、今朝毛利氏見え、おみきさんを手傳に寄越下さる、主人も大變その親切を喜ばる、午後少し休まる、本庄氏見え御待ちを賴める處へ、金子樣、荒木氏と見え、御目にかゝる、長久氏見える、あき子の熱四十度に上る、皆々心配す、武二も追々熱高くなる、孝に夜の世話を賴む、大津より芳太郎氏に電話かゝる、次男の病氣むつかしき樣子にて急ぎ歸津なさる。

四日、今朝雨降りにて氣分惡し、文之助氏を呼び長話せられ後少し胸痛む、子供の熱其後不規則にて安心出來ず、心を痛む、あき子は少し下り氣味なるも、武二は九度以上に上る、須原も少しは良き樣見受く、ゆるゆる世話してやること、出來ず只案じるのみ、午後松永先生見え、北海道の傍士氏、竹村氏見舞に見える、澤村氏御越下され、私より容體聞かれてお歸りになる、後永井氏及谷垣校長來て下さる、すみ子又熱あり。

五日、朝氣分宜しき樣見える、天氣又惡しく困る、大津の子供死去せらる、誠にお氣の毒に思ふ、不取敢弔電を送る、子供等少し熱下る、武二中々むづかり皆々困る、文之助氏大津へ御越になる、今日又髭そりをなさる、プツヂングを召上る、須原未だ起られず、千代も未だ熱あり、手は入るに人は足らず、自分一人氣をあせるのみにて何とも致し方なし、おとしさん御越になる、あき子、武二又熱上る、誠に心配す、岡氏晩に見える、今日は湯にておからだを拭く、大變氣持よしと申さる、昨晩便通あり今日先生に御目にかける、良き便と申さる。

六日、今日は久々にて好きお天氣、主人は別に變りなし、武二は痲疹の樣子、少しく

ホロセ出づ、松永先生に朝から診察をして戴く、あき子熱下らず、氣管支加答兒ゆゑ濕布せよと申さる、重ね重ね重病人出來自分は疲勞と心配にて頭重苦し、文之助氏と種々お話あり、時間長き爲心配す、午後プツヂングを召上る、いつもお氣に召す、松永先生見え血色良くなりしと申さる、子供の室に酸素を入れるやう申さる、お店へお願ひして藤田氏に來て取附けて戴く、大變心地よき樣申さる、お店よりお花を戴く、午後宮崎より看護婦來る、兎も角子供の方を賴む、今日あたり須原も餘程よくなり喜ぶ、晩に岡氏見え、色々お話せらる。

七日、今日は好き天氣にて晴やかなれば、お氣分も大變宜し、九時西先生御越下さる、診察の結果大分宜しき樣申され、輕き魚肉位少しづゝ副へる樣お許し出る、あき子も須原も餘程よくなる、夜分すみ子熱あり、氣分惡しく休まず、又々仲間入りするらしく實に困る、併し主人の方追々快方に向ふことゝて力を得て看護す、午後便通あり、松永先生見え、便お目にかける、良き樣申さる、あき子は熱下る、武二、すみ子は熱あり、主人は矢張横に休まるゝとからだ痛むと申され、お氣むつかしき樣見え、自分も一人心を痛むるのみにて何とも致し樣なく、只一心に其全快の一日も速かなら

んことを祈る、岡氏見え御目にかゝり、色々お話あり、すみ子機嫌あしく困る。

八日、朝天氣よく晴々す、髭をそらる、お晝初めて魚肉一切召上る、大變おいしく喜ばる、午後製鋼所の依岡氏、中村醫師同道にて見え、主人を診察して戴く、別に惡しき方にはなけれど、中々養生法むつかしく、色々と大層にお話になりてお歸りなさる主人も一時大變元氣の樣見え居りしが、餘り大層にお話を聞かされ、少し氣を惡くせられ、お氣分重き樣見ゆ、すみ子機嫌惡しく、其上後へ後へと來客あり、自分も重る心配と疲れとにて心身共に消え入るが如し、谷垣先生、後藤氏、岡氏見える。

九日、今日も天氣よく、朝は大變お氣分宜しく見える、文之助氏來らる、よし子は今日より床上す、すみ子は熱高く氣分惡しく、實に可愛さうにて、出來得るなれば、夜晝自ら世話してやり度は親心の山々なれど、すみ子を見て居りて主人の方に手落ありては一大事ゆゑ、心を鬼にして成るべくすみ子に顏見られぬやうおふくに賴みおく、此の心の中何にたとへやうもなし、お晝主人に鰈一切差上る、大變喜んで召上る、四時頃森樣御越下さる、色々御用談あり、五時頃お歸りになる、今津より御母樣、勇藏樣同道にて突然御越になり驚く、多分御心配の餘りと思ふ、色々お話あり。

十日、朝早く便通あり、誠によき便なり、食事は此の節漸く粥一、玉子二、鰈一切位三度々々に召上る、其間肉汁二回牛肉三合を取らる、午後御母様、勇藏様御歸津になる無人の折柄とて一向御かまひ出來ず、誠に濟まぬと思ふ、松永先生見える、髭をそらる、自分は昨日より胸つかえ痛みを覺え、一食も取り得ず、主人休まれて間もなく柳田様御越になる、今日あたりは餘程顏色よき様人目にも思はれて嬉し、すみ子は今日が山らしく思ふ、主人又便通あり、多分藥の爲と思ふ。

十一日、昨夜主人もすみ子も始めてよく休まれ、餘程氣分宜しき様思ふ、朝文之助氏見える、ビスケットを召上る、お氣に入りたる様子、松永先生の御許しにて須原床上す、あき子も起てもよき様申さる、看護婦歸る、今津の母上より花を戴く、谷垣先生見え、後芳太郎氏も見える、益二郎氏の病狀を聞き誠にお氣の毒に思ふ、子を持つ親の心同情に堪へず、話長びき十二時前休まる、お氣分にさはらねばよいがと心配す午後便通あり。

十二日、今日は天氣如何と思ひ居りしに、中々好く氣も晴々す、お氣分別に變りなし、朝便通あり、よし子始めて學校に行く、お美代に同道を賴む、歸りて大變喜ぶ、重永

氏御越下さる、すみ子相變らず機嫌惡しく困る、松永先生見える、後より便を持たせ遣る、岡氏夫人見え滋養藥戴く、夕食も無事に濟み喜ぶ、文之助氏大阪よりカルカン二箱を買うて來て下さる、一箱は文之助氏方へ持たせて遣る、岡氏見える。

（此頃カステイラ、ビスケツト、カルカン位を日に二回差上ることゝなし居る）

醫師より流動物のみ取るやう言ひ渡されしより、早くも三週間たちぬ、平素至つてお丈夫の主人ゆゑ、嘸かし此の長日月の間、身心共に云ひ知れぬお苦みを感じ給ふらんと、お氣の毒に思ひ、十分お察し申す、自分は平生餘り强からぬ身體なれば、病氣には人一倍御同情申す、併し昨今餘程血色も良くなられ、食事も心よく召上り給へば、自分の疲れ位は何とも思はず、日々看護してよきお顏色見るを樂みに暮す。

十三日、朝より空少し曇れど、お氣分には別に變りなし、西先生松永先生御出下さる、別段變りなき故、食事は少しづゝ殖す樣申さる、古河夫人御越下さる、便通あり、大津の女の子又々病氣の由電話かゝる、芳太郎氏すぐ歸津せらる、今日は召上りもの稍々殖えし爲か少し胸痛まる、自分は一人心配す。

十四日、又雨降りにて鬱陶しく困る、別段お氣分には變りなし、岡氏來らる、文之助

氏見える、中井氏夫人より美しきお花を戴く、午後お店の森樣御出に成る、御用談あり、松永先生見える、食後髭をそらる、後におからだを拭ふ、播新主人來て下され、大變血色良くなられたりと喜ばる。

十五日、今日は好きお天氣にて晴々す、朝の食事は氣持よくせられしが、九時頃より胸の痛みありお案じ申す、十一時頃迄休まれしが、お目ざめ後お氣分よし、午後椽にて御用をなさる、播新の番頭さん向井氏來らる、お菓子を戴く、夜毛利氏方へ伯母樣御禮に行つて戴く、岡氏見える、今夜はどこも痛まずと申され、安心して休ませて戴く、四時頃便所に立たる。

十六日、今日も晴て氣持よし、お氣分よき樣見受く、昨夜おそく山村より生きた小魚澤山貰ひ、今朝の食事に召上る、大變味よく大喜びにて召上る、午前中茶の間の方に床を取り暫く休まる、趣變り大變心地よささうに思ふ、松永先生見え、餘程よくなられしと申さる、もう庭先位へは出てもよしと申さる、芳太郎氏見え、子供の病氣惡しき樣申さる、お氣の毒に思ふ、清さんに書留郵便を持たせてやりしに、ポストへほり込みしとか、其ためお店の岡氏にお願して、本局にて調べて戴く、病床の主人に、か

ゝる出來事の爲色々氣をもまし、誠に濟まず思ふ、六時半頃岡氏より電話にて手紙ありし由知らせて戴き、皆々安心す、一時は一方ならず心配す、以後は斯かる事には十分注意せねばならぬと思ふ。

十七日、朝お目ざめになり、昨夜少し胸痛みしと申さる、餘り昨日氣分よきに任せ御用過ぎし爲と思ふ、十時頃より庭傳ひにて茶の間へ行かる、十二時こちらへ歸らる、おゆか樣よりお手紙いたゞく、自分に對し御親切のお言葉戴き喜ぶ、午後松永先生見える、北尾氏御越下さる、話大分長びき心配す、夕の召上り物少し多かりし爲か夜分胸痛まる、暫くおさすり申せしが、お氣分直りて休まる、出來得る限り御介抱申さんものと、寸時も油斷することなけれども、何分子供あることゝて思ふに任せず誠に殘念に思ふ。

十八日、朝早く雨降り居たりしが、九時頃より好き天氣になる、今日は丁度御本家の運動會ゆゑ、子供等に行けと申されしが、子供等も病中の主人の事思ひ氣進まずとて行かず、一入不愍に思ふ、昨日より便通無き爲か、食物つかえし爲か、今朝食後大變胸つかえ痛む、十時頃便所へ行かれしが、むかつきて上をつかはる、自分は如何せ

んと一人心配す、十一時頃より休まる、三時お目ざめ、幾分お氣分直りしやう見ゆ、自分は心配の餘り食事喉を越さず、松永先生の御來診を乞ひしが、今日は大掃除とかにて藥だけ戴く、柳田樣、門司の西岡樣、御越下さる、お目にかゝる、大阪の本庄氏見える、お話中松永先生見え、診察して戴く、やはり食物多き爲ならんと申さる又お魚を一寸見合せよと申さる、夜分又胸脊中少し痛まる。

十九日、朝はよきお天氣にて喜ぶ、未だ少しお疲れあるやう見ゆ、朝の食事進まず玉子だけ召上る、九時西先生御越下さる、御診察の結果やはり食物つかえしやう申さる、宮本氏御越下さる、芳太郎氏見える、お晝の食事に極少し魚を添へ、粥少し玉子二個を召上る、髭をそられ、からだを拭ひて、お氣分少し直る、午後文之助氏見え、本庄氏母堂死去の由承る、夕食は味よく召上り、やゝ安心す、便通なき爲大變氣にせらる西先生の仰にて、脊中胸の痛む所へ藥を塗る。

廿日、昨夜は餘り胸も痛まざりし樣申さる、昨夜本庄氏より澤山お魚を戴く、今朝便通あり、午後暫く茶室にて休まる、松永先生の診察を受けらる、昨夜岡氏を通じて金子樣より、大阪に良き醫師あれば是非診察して貰ふ樣勸められしが、主人は見て

貰ふ必要なしとて、折角お勸め下されしがお斷りす、本家の御主人御越下され、誠に恐れ入る、夕食後に孝香魚を少し吳れる、すぐ煮つけて差上る、大變珍しくおいしいと申さる。

廿一日、昨夜もお藥のお蔭か脊中痛まず、又昨夜の香魚召上る、九一を呼び散髪をなさる、大變氣もちよしと申さる、今日はお氣分も餘程よき樣見受く、お晝の食事もおいしく召上る、文之助氏より又カルカンを戴く、すみ子喜んで戴く、岡氏お越下さる。

廿二日、今日もよきお天氣、お氣分には變りなし、昨夜岡氏にことづけ、柳田樣よりスツポンエキスを戴く、お湯にてからだを拭ふ、食事の方は少しも變りしもの差上げられず、誠にお氣の毒に思ふ、日に粥三碗、牛乳三合、肉汁二回、病床に入られしより早一ヶ月、其間のお苦み一入の事と同情に堪へず、何か好きおなぐさみもと思へども、別段よき思案も出ず、たゞ花を入れ替へ、お氣をまぎらはす位の事のみなり、山本氏より關雪の幅御見せ下さる、兎も角お借しておく、今日は大變氣分よき爲お店の通信をすることて一心にお作りになる、書くことは明日になさる樣申せしがやはり

平素のお氣質として、なかなかお聞入れなく書きつくさる、自分も側にて通信記事を讀みて、誠にお氣の毒に思ふ、お店を休まるとも、お店の事のみ氣にかゝり、寸時もお心の休まる間なく、思はず涙を流す、芳太郎氏お越になる、大阪より岡田氏來る、本庄氏、おゆか樣お越なさる、九時頃歸らる、須原神戸驛より關雪の幅受取りて歸る、一度掛けて見よと申さる、お休み後又大變胸痛む、暫しおさすり申す、多分晝の疲れと思ふ、夜通しお案じ申す。

廿三日、朝早くお目ざめになり、昨夜は氣の毒なりしと申さる、自分は夜通し不眠不休にお世話申すとも、少しもつらく思はず、只一日も早く御全快あらんことのみを樂みに看護致し居るに、かくも優しきお言葉戴き、自分の疲れも一時に消失せたる心地して嬉し、やはりお氣分よきに任せてなさる晝の御無理が、おからだにさはることゝ思ふ、お休みになりて以來、色々の事にて御心勞多く重り、誠にお氣の毒に思ふ、せめてお氣のみなりと休まれば、少しは早く快方に向はるゝならんにと、それのみ一人心を痛む、夕食に大根一切煮つけて差上ぐ、大變おいしく召上る、岡氏見える、今日は便通二回。

廿四日、折角大切に殘し置きし大根、今朝こげつかせしため差上ること出來ず、誠に殘念なり、電報御覽になる、髭をそらる、今日始めて小鯛手に入り、煮つけて差上る大根又よく煮て差上る、何れもお氣に召す、午後服部氏見えしがお目にかゝらず、谷垣先生見え機嫌よくお話になる、松永先生見える。

廿五日、今日は好きお天氣にて氣持よし、朝のお食事も機嫌よく召上る、昨夜はどこもお痛みなく、良きお顏色見て自分も嬉し、電報に目を通さる、御本家のお家樣より鉢植の花を戴く、別に又牡丹を戴く、瓶に入れお目にかける、午前中庭さきへ出らる午後は讀書に費さる、よきお話相手もがなと思ふ、芳太郎氏、宗像氏見える。

廿六日、朝天氣惡しく雨少々降る、岡氏に用事お賴みす、西先生の御越を願ふ、松永先生おそく見える、診察の結果少しづゝ食物をふやして見よと申さる、お湯に入りても差支なしと申さる、髭をそらる、今日お晝に粥を一碗と三分ノ一にしてみる、食後山脇氏より手紙來る、それにつきお店の澤村氏へ手紙書かれ、お店へ持歸りて戴く、谷本氏お花を持ちて見えお目にかゝる、板原氏よりお知らせ下されし、大阪の靑山と云ふ醫師來て下されしが、都合よくお斷りす、山脇氏見えお目にかゝる、午後便

通あり、氣分よしと申さる。

夕食後病床に入られてより、初めてお湯にはいらる、お流し申す、大變氣持よしと申さる、何分久しぶりの事とて、自分はお疲れなきかと一人お案じ申す、岡氏見える

廿七日、天氣よく晴々す、お氣分もよささうに見受く、お湯のさはりもなきやうにて安心す、朝電報の寫に目を通さる、柏氏見えお目にかゝる、西先生のお内へ禮を持たせ遣る、御註文の畫帖來る、目を通さる、四時頃より本箱を一ッ買ひ求め來よとて孝を賴み三ノ宮迄行く、久々にて道を歩き大變疲る、留守中は萬事ふみ子に賴みおく、夕方文五郎氏見え、少しお氣にさはりし事ありて誠に心配す、お胸痛む、暫くおさすり申す、夜中便所に立たる。

廿八日、今日もよき天氣にてお氣分もよし、髭をそらる、例の電報にお目を通さる十時頃より又胸痛まれ十二時頃おさまる、牛乳も肉汁も召上らず、お晝の食事は召上る、小森氏見える、中川氏見え色々珍しきもの戴く、方々へ分配す、谷垣先生、澤村氏見えお目にかゝる、お歸り後すぐ食事をこしらへ召上る、椋野氏、岡氏見える。

廿九日、朝お目ざめになるなり、昨夜は別におさはりなかりしやと尋ねしに、何と

もなしと申さる、午前中電報に目を通さる、山村色々價安き品ありとて持參す、お目にかけ買取る、食後庭さきへ出らる、前川より表具出來て持參す、皆懸けて目を通さる、自分は朝の程より少し頭痛せしが、午後大變氣分惡しく誠に困る、明日は節季の事ゆゑ、書出し等調べ、夕食すまされて後、お氣の毒なれど休ませて戴くことゝす、朝より食事も取らず、服藥のみせしが一向きゝめなし、須原とふみ子に賴みおきて、お先に休みたり。

卅日、昨夜はお痛みなかりしかと、自分のつらさも打忘れ、それのみ氣にかけ居りしに、朝お目ざめになりて、昨夜は大變苦しさうに見えたり、今朝は如何と尋ねられ何とも云ひ知れぬ嬉しさと悲しさに胸迫り、知らず識らず涙に咽ぶ、只有難うと一言云ふだけが精一ぱいにて、病中の主人に自分のこと迄心配かけ、誠に濟まぬ事と思ふ、しかし今朝はお氣分よささうに見受け安心す、小切手を書いて戴く、例の髭をそらる、日光浴をなさる、午後續木氏見え、蘭の鉢植と鯉の置物を戴く、松永先生見え經過大變順調なりと申され安心す、谷垣先生、岡氏見える、お湯に入らる、自分も少し氣分よくなる。

五月一日、昨日は午後雨なりしが、今朝は漸く上りさうに見ゆ、夜前はお胸も痛まず、今朝早く便所に立たれ、七時頃床を離れらる、お氣分別に變りなし、自分も餘程氣分よくなる、午前中例の通り電報に目を通され、芳川氏への手紙を書かる、午後も椽にて讀書せらる、又森樣への手紙書かれし處へ中川氏見える、暫くお話になる、今日は少し用事多くせられしかば、今晩は如何と一人心を痛む、便通あり、昨夜より粥を少しふやす、別にさはりなし、夕食後松代氏見える、岡氏お出下されしがお目にかゝられず、自分だけお目にかゝる。

二日、今日も好き天氣なり、夜前は別段お痛みなく喜ぶ、朝は例の電報に目を通さる、髭をそらる、南米より横山氏歸朝せられ、鸚鵡一羽戴く、松永先生見える、便お目にかける、別に變りなし、桑田氏、吉田氏、中井氏來て下さる、お目にかゝらず、夕方芳太郎氏見える、谷垣先生御越になる、今日又復何か心配事出來し樣子にて誠にお氣の毒に思ふ。

三日、今朝岡氏に寄つて戴き御用お願す、九時西先生、松永先生御越下さる、又お腹に藥つける樣申さる、今日お晝よりお粥一ッ半にして、一度かげんを見よと申さる

便通あり、午後は讀書のみなさる、岡氏見える、お目にかゝらず、今晩は別にどこもお痛みなく休まる、すみ子蟲わきし樣子にて藥を飲ませる、自分も休ませて戴きしに何か心淋しく物思はれて、うつらうつらとせし折柄、すみ子目をさまし氣分惡しき樣に見えしが、一時頃乳を澤山吐く、暫くして氣分直り休む。

四日、今朝は早くお目ざめになる、別段お氣分變りなき樣思ふ、例の通り電報に目を通され、髭をそらる、午後森樣御越下さる、色々御話あり、五時前お歸りになる、楠瀬氏見えしがお目にかゝらず、お土産を戴く、夕食後谷垣先生見える、岡氏來て下さるお目にかゝらず、後藤氏、文之助氏見える、十時頃少し胸痛まれしが、大した事もなくて濟む。

五日、好き天氣にてお氣分も變りなき樣見ゆ、自分は夜中より何となく氣分惡しく物憂し、便通あり、お晝は魚好まずと申されて召上らず、又お胸つかえしにはあらずやと一人心配す、午後芳川氏御越になり、かねてお願しありし御老人の書の「メクリ」を御持參下さる、松永先生見える、後へ澤村氏御出になる、暫くお話なさる、一度庭さきへお出になりてはとお勸す、水打ち枯葉等取りてお目を慰む、夕食も變りなく

濟む、岡氏御出下さる、お目にかゝらず、別段お痛みなく休まる、此節は時々少しく痛むことあれど、お氣分は餘程よき樣見ゆ、大儀さうになさる事も餘程少く、大分快方に向はれつゝありと自分は喜ぶ。

六日、朝よりお氣分よろしき樣にて、庭へ出らる、十時頃上海の多賀氏見え、暫くお話になる、播新さん見え、暫くお待を願うてお目にかゝらる、午後文之助氏見える、夕食は大變おいしく召上る、お晝自分が殺したる蜂を其儘置きたりしに、一寸さはられしはづみに指をさゝれ給ひて誠にお氣の毒に思ふ、(今日午前中便通あり、髭をそらる、御本家よりお花を戴く)お湯を召され、十時頃休まれしに、お胸痛みし爲藥をはる、暫くしてお休みになる、自分は少しもねむれず、床の中にて氣をつけ居る。

七日、今日は雨天にて鬱陶し、朝はお氣分變りなし、電報御覽になる、髭をそらる、ハルピンの横田氏お出になりお目にかゝる、午後便通あり、やはり暇あれば書見のみなさる、四時過柳田樣御出下され、六時過迄御用談あり、東京の北村文五郎氏見え、自分だけお目にかゝり御禮申す、お土産頂戴す、夕食後お湯を召さる、岡氏來て下さるお目にかゝらず、便通又あり。

九日、今朝早くお目ざめになり、夜中少し胸痛みしが大した事なく、自分を起さざりしと申さる、誠に濟まぬと思ふ、早くに便通あり、朝の食事お待になる、食後電報御覽になる、谷垣校長見える、加藤氏來て戴く、自分だけお目にかゝる、カステイラを戴く、午後建石氏、後藤氏見えお話になる、松永先生來て下さる、今日は鰯のよきものあり召上る、大變おいしいと申さる、十時頃お胸痛む心地せられしかば藥を塗る。

十日、今朝は別段お氣分變りなし、岡氏に寄つて戴く、粥一ッ半召上る、鶏鵡を御本家へ差上度旨岡氏にお願せしに、すぐ取りによこして下さる、九一を呼び散髪せらる、午後お店より手形を御持參になり、それに一々お名前書入れらる、後は讀書のみなさる、自分は今日も亦何となく心地あしく、食事進まず氣力なく感ず、併し十分注意して、主人に對して不都合なき樣心かけ居る、午後西洋間にて御本を調べらる、二階の本箱より本を出し來りてお目にかけたり、丁度谷垣校長見えしが、御歸り後又御本に目を通さる、入用だけ奥へ持行く、今日少しづゝ二回便通あり、夕食も大變おいしく召上る、岡氏御用ありてお出になる、使の人電報と手紙を持來る、夜分それに目を通さる、お湯を召さる、今夜は胸も痛まず休まる。

十一日、今日も別段お氣分變りなし、新聞電報に目を通さる、丁度九時過西先生、松永先生御越下さる、別に容體に變りなし、食事もゆるゆるふやす樣申され御歸りになる、重永氏御越下さる、午後庭さきへ出られ書見のみせらる、大變おなかが空くと申され、五時半に夕食差上ることゝす、御自分はおなか空くと申され、醫者は多く食べてはならぬと言はる、差上たきは山々なれど、其ため後戻りしては大變と、差上たき物も得差上ず、誠に心ならず日々を過ごす、よき便通二回、自分も氣分少し惡しく休ませて戴く。

十二日、朝早くお目ざめになり、昨夜は大變らくなりしと申され、誠に嬉しく思ふ便通あり、少し下痢せらる、江州より磯邊氏久々にて來神せられ、四方山の話に花咲きお晝過まで居られ、山口へ歸らる、廿四年ぶりの會見とて、色々話に實が入り、お互に子供小さければ、まだまだ長生せねばならぬと申され大笑す、文之助氏、澤村氏見える、大阪の岡田氏來る、暫く待つて戴き夕食を差上ぐ、主人も夕食後奥にてお目にかゝらる、珍しき幅持參せられ、床にかけて目を通さる、歸られて間もなく谷垣校長見える、後へ後へと來客あり、今晩のお氣分を一人お案じ申す、今日は朝の電報も大

變澤山ありて少し御無理なりしかと思ふ、お湯にはいらる、夜便通あり、別段お痛みなく休まる。

十三日、朝早く便所に立たれ、其後お目ざめになり、おなかが空くと申さる、夜もお痛みなく、大變お氣分よく、自分も嬉しく思ふ、昨日岡田氏持參の對山の幅買求めらる、電報及び新聞に目を通さる、髭をそらる、少しおなかの具合惡しき樣見受ける、昨夜芳川氏に託して、横濱の北村氏よりウエフアスを戴く、大變喜ばれて北村氏、芳川氏に御禮狀差出さる、便通少しあり、食後暫く休まる、三時頃寺崎氏見えお話せらる松永先生見え、明日來て戴く樣お願して歸つて戴く、四時頃より兵庫へカンカンを見に行く樣申されし處へ、大阪池田の老母見え、五時頃歸らる、すぐ夕食差上げ、今の間に一寸兵庫へ行きますと申せしに、遲き故明日にせよと申され見合す、病氣次第に快方に向ひ、松永先生時々カンカンにて重量をはかる樣御話あり、御自分の爲又子供にも時々用ひたらば宜しかるべしとて、カンカンを買ふことゝす、今日は別段お痛みなく休まる、谷垣先生見える。

十四日、朝早くお目ざめになる、朝の食事も機嫌よく濟まされ、例の新聞電報に目

を通さる、九時半牛乳を召上る、大變今日は味よきやう申され喜ぶ、十時肉汁を差上る、後カンカン屋へ行くやう申されし故、暫くお氣をつけて居て下されと申して、車にて大急ぎにて行く、丁度十一時宅へ歸る、樣にて讀書し居らる、只今と申し、色々見本お目にかけ、あれかこれかとお話になりしが、俄に少しおなかの具合惡しと申され内に入らる、床の上に座られし儘にて、横になること出來ず、次第にお痛みはげしき樣見受く、驚きて松永先生を電話にてお呼び申し診察を乞ふ、此痛みはガスが腸にたまりし爲なれば、ガスを取らねばならぬと申され、色々手當して戴きしも、なかなか痛み去らず、益々痛まれお苦しみになれど、如何とも手のつけ樣なく、只側にありてお苦しさも一入ならんと一人心をあせるのみ、三時頃西先生見え診察せられしが、やはり同樣の見立てにて、其中やゝ痛みもおさまりし樣に見受く、しかしからだを動してはならぬと申され、床の上に座られし儘にて、誠にお氣の毒に思ふ、度々カンフル注射を受けらる、五時頃松永先生歸らる、痛みはしばしおらくの樣なれどおからだはお疲れの樣見受け、自分は只氣をあせるのみ、午後九時頃又松永先生見え診察せられ、多分明日になれば餘程おらくになると申され御歸りになる、自分は

以前西先生、松永先生に、腹膜にあらずやと度々お尋ねせしが、別狀なき樣申されし故、明日になれば先生の仰せの通り餘程おらくになることゝのみ思ひて、夜通しお側にてお世話申す、二時間毎に藥を差上げ、其間水を召上る、少しもお休みなく朝迄辛棒なさる、別段お苦しみはなけれど大變お弱りの樣思ふ。

十五日、朝八時半松永先生見え、診察の結果少しく案じられる容體と申さる、唯自分は如何になり行くことかと案じるのみ、九時西先生見え診察せられしが、大分容體惡しき樣子にて、食鹽水の注射をする樣申され、松永先生器具を取りに行かる、其間文之助氏に賴みて親類へ電報打つて戴く、金子樣へ電話かけしが、お留守にて柳田樣、森樣すぐ來て戴く、容體も追々惡しき樣見え、自分の心痛とても筆紙には悉せず、其後大したお痛みはなけれども、次第にお弱りになる樣思ひて、自分はしかとおからだをお抱へ申す、色々言葉かければ、お耳には入るやうなれど、別段何も申されず、食鹽注射の終るか終らぬ頃に、お顏色次第に惡しくなり、息遣ひも大變元氣なくなりしかば、先生に御注意申せしが、其内早呼吸變り來り、先生はもうだめです、お氣の毒なれど致し方なしと申さる、私に抱かれ手を固く握らる、私も固く握り返せし